

---

# 御当主に恋をして

草薙静那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

御当主に恋をして

### 【Nコード】

N0827D

### 【作者名】

草薙静那

### 【あらすじ】

友達と海へ遊びに行き私有地である男の人にあう。人間嫌いの御当主に恋をしまい苦悩する美冬。二人の関係は……。

## 第一章（前書き）

つたない文章で誤字脱字があるかと思いますが読んでいただければ幸いです。

## 第一章

連れて来られた部屋。

私は状況が理解できず戸惑っていた。

数分前の事。

私と勇矢は知らないうちに人様の敷地に足を踏み入れていた。

「ここで何をしている!!」

長身の男の人が掴みかかってきた。

「えっ?少し探検のつもりで・・・」

「ここは私有地だ!!」

そう言われた結果が今の現状である。

二人は待つしか無かったここのお屋敷の主が来るまで・・・。

私は勇矢ユウヤにしがみ付き事情を話している姿を見つめていた。

「俺たちが入ってしまったのは偶然なんです。気を付けますから帰してもらえませんか?」

勇矢は私を後ろ手にかばうように言った。

「旦那様がどうなさるか決められるまで待ちなさい」

物静かなその男性は冷ややかな顔でそう答えると部屋を出て行った。

「どうなるのかしら？」

「大丈夫だよ帰してくれるさ」

私の頭をポンとたたくと抱き寄せてくれた。

優しげな男の様子と頼りなげな女の様子とを合わせてみると恋人の様にみえるだろう。

大好きな勇矢。

どんなに思ってみても彼女が居る。

妹のようにしか見てくれない人。

勇矢の服をギュットつかむとうつむいてしまった。

「見せ付けてくれますね」

声のするほうに顔を向ける。

とそこには綺麗な男の人が立っていた。

「あなたがここの方ですか？」

「そうです。私有地に入るとは……。」

「知らない所なので探検してみたくて。知らない間に境界線を越えてしまっていました。」

「知らない間にね」

「申し訳ありません。許して頂けませんか？」

勇矢は丁寧に頭を下げ誤った。

でも男の人から帰ってきた返事にビックリ。

「あなただけ帰して差し上げましょう彼女を置いていけるなら」

「なっ！！美冬を置いていけるわけが無い！」

「では、あなたもここで働きますか？私はこの土地に来ている時は誰にも邪魔されたくないの

でね。足を踏み入れたものを外へ出すのはイヤなんです」

「でもなぜ・・・」

「帰してこの事を話されるといらぬ客が増えるんでね」

「俺だけなのはなぜですか？」

「女は口が軽いここでの事をすぐ話してしまつてしょ」

「俺も口が軽いかもしれないでしょう？」

「あなたにとって大切な美冬さんが居る。人質としてね」

冷やかな笑みを浮かべると男は側のソファアームに座った。

何を考えているのかまったく分からない。

でもこの人の言いなりになるしかないのは何となく分かった。

「どうしますか？」

「一人で帰れる訳が・・・」

「かまいませんよ。一人も二人も同じですから」

男は含み笑いをすると部屋を出て行くこととした。

「勇矢！あなたは帰ってあげて彼女が悲しむは」

「君のご両親だって」

「美冬さんの事なら心配は要りませんよ。神隠しのような事にはしませんから」

「あなたは何を考えているんだ。美冬をどうしようと思ってる」

「帰ってしまうならばあなたには関係の無い事。心配なら彼女を諦めて美冬さんの側に居てあ

げたら如何ですか？」

勇矢は私を見るとどちらも選べない様子で苦しそう。

「行けばいいのよ彼女のほうに。私の事、振ったんでしょ」

勇矢は男の方を見る。

「美冬は俺の妹みたいなもんだ。それをこんな所に・・・」

「どっちつかずはいけませんよ勇矢君それでは美冬さんも可哀想だ」

「行つて!!」

私は勇矢を男のほうに押した。

「この人を連れて行つて。私がここに残ればいいんでしょ」

男は私を見ると勇矢を連れて部屋を出て行つた。

私はどうなるのかしら？

私有地に入ってしまったただけなのに・・・。

## 第二章

部屋に取り残された私は側のソファアに座った。

勇矢は帰っただろうか？

それとも私を迎えに戻ってくれるだろうか？

何を勝手な事を・・・。

自分が行かせたくせに、未練がましい自分がある。

ぼんやりとそんな事を考えていると初めに会った物静かな男性が入ってきた。

「あなた様のお部屋をご用意致しました。こちらへ」

男性の後へ着いていくと部屋へと案内された。

案内されたのは大きな部屋でビックリ。

「ここでは御当主のお世話をお願いします」

「御当主のお世話ですか？」

「こちらには最低限の雇い人しか居りませんので御当主のお世話係りが居ませんから」

「分かりました」

私で出来るのかな？

人の世話なんて……。

自分の事でもままならないのに。

「御当主のお呼びが無いときは自由になさって下さい」

「はい」

「それと御当主のお名前は桜羽サクラバ 誠真様セイマと仰います」

「誠真様」

「そうです。御用が無い時はお側を離れるように。お人嫌いの為。人が側に居る事を嫌がられます」

「ます」

「お人嫌い？」

「分かりましたか？」

「はい」

ここに居る限りはお仕事を頑張るしかない。

何より勇矢の事を考えないようにする事が私の為。

翌日、部屋のダンスには私用のメイド服が用意されていた。

「誠真さま、朝食でございます」

「テーブルの上に・・・」

そう言うと手を振り出て行くようにうながされた。

庭のベンチに腰をかけ勇矢を思う。

ぼんやりと空を眺めて大半の時間を過ごしていた。

ゆっくり流れる雲を見て勇矢を思い出す。

「優しかったものね。勇矢は・・・」

友達の紹介で初めて会った。

とても優しく、話を良く聞いてくれる。

そんな勇矢に少し大人を感じたのかもしれない。

みんなの進めに押されて勇矢の事好きかもと思っただけ。

勢いで告白して見事に玉砕。

勇矢には彼女が居ても大切そうに話していた。

あんな悲しい気持ち忘れてしまいたい。

それからは誠真様のお世話をする事に心を注いだ。

半年ほどが過ぎたある日。

「美冬さん御当主がお呼びです。お部屋のほうに」

「分かりました。すぐに行きます」

彼のお世話をするようになってびっくり。

とても美男子で息が詰まりそうなほど存在感のある人。

なんとなく彼のなさる事が気にかかり、彼を目で追うことも良くある。

「失礼します。美冬でございます」

「入りなさい」

彼のお部屋に入るとゆったりと椅子に座っておられた。

とてもかっこよくて目が離せなくなる。

「あの御用はなんでしょう」

「コーヒーを……。」

かっこいい！彼を見て単純にそう思う。

コーヒーを持って書斎へ戻ると彼のテーブルに置いた。

すると腕をつかまれ引き寄せられる。

「なっ！何か？」

「私の顔に何か付いているのかな」

彼の顔には笑みが浮かんでいる。

でも、明らかに目は笑っていない。

あまりに近くに顔があり、男の人の腕の中に居る事で心臓が飛び出してしまいそう。

「あんまり見つめられると気があるのか思ってしまった。それとも、気があるのかな？」

「.....」

彼は鼻で笑うと手を離れた。

一瞬、ドキツとして立ち尽くしてしまった。

気がある？

そんな事ある訳.....。

どうなの？無いと言える。こんなに素敵な人を前にして・・・。

勇矢の事もこの人を前にするとどこかに消えてしまう。

もしかしたら私はこの人のことが気になり始めているのかもしれない。

何となく自分の気持ちを意識しはじめた。

### 第三章

意識し始めると止まらなくて、彼を前にすると失敗ばかり。

勇矢を思つように好きなのは少し違って落ち着かない。

ドキドキを胸の奥に押さえ込み彼のお世話をする。

「美冬。ここを出るから荷物をまとめておきなさい」

「誠真様？ここを出られるのですか？」

何を考えているのかしら。

「そう言ったと思うが」

「はい。そう聞こえました」

「だったら早く用意を済ませておきなさい」

彼は言い終わると部屋を出て行くように身振りで示すとまた仕事を始めた。

よく分からないけれど一緒に行くのかな？

本当に私をからかう時意外はクールで人を近寄せない人。

こんな人の何処がいいのかな。

見た目は確かに良い。

甘いマスクで近寄られたら胸が張り裂けそうくらい高鳴る。

でも優しくされた記憶はあまり無いように思うな。

私の性格に問題があったりして・・・。

その日の夕方には島を出た。

何処へ行くのかはやっぱり教えてくれない。

まあ悩んだところで目的地にはいつか着くわけで、考えるのをやめる事にした。

「美冬。車に乗り換えるぞ起きなさい」

いつの間にか飛行機の中で眠ってしまっていた。

「はい」

まだ眠い目を擦りながら立ち上がり降りる用意をする。

「かなり無防備な様子だな」

「えっ?」

「その姿はかなり誘惑が大きいようだ」

そんな事を言っている彼を振り返ると、からかう様な笑みを浮かべていた。

「冗談を仰らないでください」

甘いマスクでそんな事を言われたら私の方が誘惑されてしまう。

からかわれていると分かってもドキドキは治まらない。

「さあ。行くぞ」

車に乗り換えるとまた長い道のりを車に揺られる事となった。

次に起こされたのはお屋敷についてからだった。

「ついたぞ。起きなさい」

また起こされてしまった。

「おはようございます」

「夜だけだな」

「こちらは何処ですか？」

「私の家だ」

「誠真様のお家でございますか？」

大きくて家というよりは屋敷かな。

「とりあえず部屋を案内させるから。着替えてきなさい」

「はい。分かりました」

「その後は食事にする30分後に迎えに行くからな」

「えっ?」

「時間はどんどん過ぎるぞ」

彼はポソと言うと行ってしまった。

「美冬様こちらでございます」

年配の女性が部屋まで案内してくれた。

「ありがとうございます」

案内された部屋はまたも大きな部屋で使用人が使う部屋とは思えない。  
い。

でかい!何なのこの部屋!

私を使う部屋じゃないでしょ。

あっ時間急がないと。

部屋についているバスルームを使わせてもらい慌てて用意をした。

「なんとか間に合った」

「その様だな。さあ食事はこっちに用意させてある」

案内されたのは一階にある部屋で大きなテーブルがバンと置いてあった。

「誠真様。私は使用人です。一緒に食事など」

「島では何も言わなかったと思うが」

そう島ではこの人と食事を一緒にする事もあった。

「でも島ではこんなにお手伝いさんいらっしやらなかったから」

「関係ない。君は私の客人だ。島での様なことはしなくて良い」

「えっ？では私の仕事が」

彼はテーブルの椅子を引くと私を座らせた。

「まずは食事にしないか？」

「はい……。」

とにかく食事を食べた。

味なんて分からない。

自分の今後が気になって落ち着いていられない。

家に帰るよつに言われたらどつしよつ。

側に居たい。

この人の側に……。

## 第四章

食事が終わり今は彼の仕事部屋にいる。

「どうして島を出たんですか？」

「仕事の都合だ」

仕事の都合ね。でもここでは私は必要ないみたい。

何故一緒に連れて来られたのかしら。

「私は何をすれば良いのでしょうか？」

島でのような事はしなくて良いのは分かる。

こんなに人がいては私のできる事なんて限られてるしね。

「何がしたい？」

彼の顔を見る。

何を考えているのかは全然分からない。

「何がと言われても・・・」

彼のお世話をしているのが今の私の幸せなんだけどな。

そんな事言えないしね。

私の気持ちなんか知らないで適当な事を彼は言う。

「好きにしていればいい。用がある時はこちらから声をかける」

そう言うとパソコンに向い仕事を始める。

本当にカツコイイ。

「また見つめているよ。惚れられてるのかな？」

何時ものからかいの目。

その顔にもドキドキさせられて顔をそらせた。

「本当に気持ち顔に出る人だな」

「言わないでください」

「私なんかの何処が良いんだか？」

肩をすくめると、またパソコンへと顔をおとした。

彼の言葉にビツクリ。

気が付いていたんだ。

「私にも分かりません。でも好きみたいなんです」  
勢いで言ってしまう。

「・・・」

彼は顔をパソコンから私へと向ける。

「だからどうなんだ？」

彼の目にはからかいの色は無い。

「え？」

「私には答える気持ちは無いよ」

「分かってます。だから何も言わなかったんです。それをあなたが・  
・・・」

挑発したんじゃないの。

心の中で言い返してみる。

でも、少し気持ちが落ち着いた気がする。

サイは投げられた。

彼に気持ちは伝えただから遠慮はいらないよね。

後は頑張るしかない。

「私の気持ちを伝えました。答えて欲しいなんていいません」  
彼の顔を見る。

「そう・・・」

「でも諦めるつもりもありません。だってあなたはフリーですもの」  
ニッコリ笑って彼の顔を見返す。

彼は肩をすくめるだけで何も言わない。

初めはこんなものよね。

覚悟してください。

私は諦めが悪い方なの。

あなたから仕掛けたんだから。

## 第五章（前書き）

御当主の友人登場！どんな人なのか？

## 第五章

彼は島に居た時ほど家にはいない。

私はというと、読書をしたり、庭のお花のお世話をしたりして時間を過ごした。

「本当にここも時間の概念が無いわね」

ゆったり流れる時間に心が和む。

あの告白をしてからも、あまり変わりはない。

相変わらず誠真様は何時もどおり……。

「はあ……。」

何か秘策が思いつくわけでなく。

無駄に時間は過ぎていく。

とにかく自分を売り込む時間が無い。

会ったとしても興味の無い人に自分を売り込むのは難しい。

またため息を漏らす。

「美冬さんですか？」

突然の声。

あら綺麗な顔。誰かしら。

「はい。そうですけど」

「へー誠真がずっと手元に置いてるっていうから気になってたんだよね」

「はあ？」

「こんにちは。僕の名前はイチノネズヤ一瀬一哉よろしく」

「ハマミユ葉山美冬です」

「一哉さんね。何の用かしら？」

「一哉様は誠真様に御用ですか？」

「違うよ。君に会いにね」

「私にですか？」

何かしらこの人には違和感を感じる。

「そう。誠真が珍しくずつと側に置いてある女の子がいるって聞いたから。どんな子が会いたくてね」

ニッコリ笑うその人の顔はなんだか目が笑っていないくて。

「会ってみてどうですか？」

「うん。可愛い断然興味がわいたよ」

「はあ。興味ですか？」

「結構、俺の好み」

にっこり笑って私の手をとった

「一哉何をしに来た？」

振り替えるとそこには誠真様が腕を組んでたっていた

「とうぜん見に来たに決まってるだろ美冬ちゃんを」

「それで用はすんだか？」

誠真様の顔にはうんざりした様子が浮かんでいた

「本当 お前はつれないね」

「それはどうも それで帰えるのか？それとも話しても？」

そう言いながら屋敷のほうへ手をむける

「そうだね」

ニッコリと笑ったお客様は私に手を振ると誠真様について行ってしまった

「いったい何の御用時だったのかしら」

誠真様のご友人とは考えにくいあの人がこのお屋敷に波風を立てることになるとはこの時考えもしていなかった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0827d/>

---

御当主に恋をして

2010年10月17日15時04分発行